無力の力強さ

先週から、4 つの福音書の中に収められているイエス様の十字架の場面を一つひとつ取り上げています。先週はマルコによる福音書の十字架の場面を取り上げました。今日はマタイによる福音書の十字架の場面です。基本的にはマルコによる福音書と同じようなお話になっていますが、違っている部分もあります。一つひとつ見ていきましょう。

実はマタイによる福音書よりも先に書かれたマルコによる福音書においても、十字架の場面では「苦難を受ける義人（義しい人）」を歌った詩編を連想させる言葉が随所に出てきていました。たとえばマルコ 15：23 の「没薬を混ぜたぶどう酒」です。マタイでは「苦いものを混ぜたぶどう酒」となっていますが、詩編 69：22 にはこのように記されています。「人はわたしに苦いものを食べさせようとし／渇くわたしに酢を飲ませようとします」。どうでしょうか。旧約聖書になじみのある人なら、ピンとくる表現ではないでしょうか。

その他にも、兵隊がくじを引いてイエス様の衣服を分け合うのは詩編 22：19 を、通りかかった人々が頭を振りながらイエス様を嘲笑うのは詩編 22：8 を連想させる表現になっています。これらはマタイの方でも踏襲されていますが、マタイによる福音書ではさらに、十字架につけられたイエス様を嘲笑う人々の言葉に詩編 22：9 の御言葉が使われていまして、よりイエス様を詩編の語る「苦難を受ける義人」に当てはめて理解しようとする傾向が顕著に見られます。イエス様こそ詩編で歌われていた「苦難を受ける義人」であり、イエス様は何の罪もない義しい人であったにもかかわらず、十字架の上で苦難をお受けになられたのだ、そしてすべての人の罪を贖われたのだという理解がここにはあります。

またマルコによる福音書とマタイによる福音書では両方とも、「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」というイエス様の十字架上の叫びを記してい

ます。マルコの方ではこの叫びが「エロイ、エロイ」とアラム語の直訳の形になっていて、マタイの方ではこれが「エリ、エリ」と、そばで聞いた者がこれを預言者エリヤと混同するお話に合わせてある、そして同時にヘブライ語形に近づけてあるという違いはありますが、共通するのはイエス様が十字架の上で徹底して弱さの極みとも言えるような姿を取っておられるということです。

このことに関連して、かの宗教改革者のカルヴァンは、十字架の上でキリストの神性はしばらくの間隠れたと語っています。キリスト教の正当な教義によれば、イエス・キリストは完全に神様であると同時に完全に人であられる、そのように神性と人性を併せ持った存在であるとされています。神様でもあられるわけですから、イエス様は十字架から降りてこられる力は十分に持っておられたことでしょう。「神の子なら、自分を救ってみろ。そして十字架から降りて来い」という罵りの言葉に応えるだけの力は十分に持っておられたことと思うのです。しかし、自分の願いではなく神様の御心が成るようにと望まれる主は、十字架の上で神性（神様としてのご性質）を全くお隠しになられた、徹底的に人間であろうとしてくださった、そのようにカルヴァンは言うのです。

イエス様はそれほどまでに深く神様の裁きのもとにある人となってくださった、まるで神様から捨てられたかのように、いや神様を敵に回したかのように不安の苦しみを負ってくださった、だからこそ主はすべての人の罪の贖いとなることができたのであるし、主に共感できない苦しみなどない、神様不在の苦しみをも主は知っておられる、だからこそ主は私たちを真に慰めることができるのだという事実を、私たちはイエス様の十字架上の叫びから汲み取らなければなりません。

逆説的に言えば、こうとも言えるでしょうか。これはウィリアム・テンプルという人の言葉です。「キリストが、自ら神よりすてられしと感ぜられた瞬間ほどに、神性がキリストにおいてゆたかに啓示せられたことはないのである」。この言葉は神性が隠れたという先程のカルヴァンの言葉と一見矛盾するようですが、カルヴァンの言葉と

ウィリアム・テンプルの言葉は十字架という一つの事柄を言い表した裏表の言葉のような気がします。

フィリピの信徒への手紙２：6～11 節の御言葉を思い出します。「キリストは、神の身分でありながら、神と等しい者であることに固執しようとは思わず、かえって自分を無にして、僕の身分になり、人間と同じ者になられました。人間の姿で現れ、へりくだって、死に至るまで、それも十字架の死に至るまで従順でした。このため、神はキリストを高く上げ、あらゆる名にまさる名をお与えになりました。こうして、天上のもの、地上のもの、地下のものがすべて、イエスの御名にひざまずき、すべての舌が、『イエス・キリストは主である』と公に宣べて、父である神をたたえるのです。」

神性を隠し、徹底的に人として神様の裁きをお受けになられたキリストのへりくだり、神学の用語で「ケノーシス」と言いますが、これによりイエス・キリストはすべての人の救いを成し遂げて御自分の、また神様の御栄光を現されたのです。マタイによる福音書ではイエス様がこのように十字架上で息を引き取られた後、「神殿の垂れ幕が上から下まで真っ二つに裂け、地震が起こり、岩が裂け、墓が開いて、眠りについていた多くの聖なる者たちの体が生き返った。そして、イエスの復活の後、墓から出て来て、聖なる都に入り、多くの人々に現れた」というお話を記していて、イエス様の贖罪の力が強調されています。

徹底的に無力な姿を取られることにより、これほど偉大な救いを成し遂げられたイエス様。マタイによる福音書の十字架のお話を読んで思わされるのは、逆説的な言い方かもしれませんが、「無力の力強さ」です。こんなことを言うと、この世の多くの人が鼻で笑うかもしれません。「無力が力強いって？」、「力をたくさん持ってこその力強さだろう」、そんな言葉が聞こえてきそうです。それは「力こそすべて」の考え方に、この世がすっかり毒されているからでしょう。

人間の歴史を振り返ってみれば、それは力への渇望に満ち溢れた歴史でした。色々

な国、色々な人が力を追い求め、力によって他の国、他の人よりも優位に立とう、そして他の国々、他の人々を支配しようと躍起になる、そんなパワーゲームに興じ続ける歴史でした。そして、その中でたくさんの戦争や争いが繰り広げられ、核兵器にまで至るとんでもない兵器が生み出されていきました。そして、おびただしいほどの屍が築かれてきたのです。

イエス様の十字架は、そんな人間の在り方にはっきりと「否」を突き付けます。無力を通して誰もが成しえなかった救いを成し遂げた御自分の在り方に従うように私たちに呼びかけます。いい加減私たちが気付かなければならないことですが、人々が権力や武力といった力の獲得と、それを用いてのパワーゲームに躍起になることを止めない限り、人類は破滅を免れないし、神様が望まれる平和な世界、御心に適う世界は成し遂げられません。

ロシアがウクライナに侵略し、それによって世界はますます力を渇望することに躍起になっています。私たちの国でも核共有の議論が噴出しましたし、防衛費の増額が決定されました。核を持たなければ、軍備を増強しなければ、自国の平和は守れない、そんな考え方がますますこの世界の主流になりつつあります。このまま軍縮の兆しが見えず、世界がますます軍拡競争に躍起になっていくのを私たちは見続けなければならないのでしょうか。

権力や武力といった力により頼めば他に支配されず、他を蹴落として自分や自国を守れる。繁栄できる。そうした考えを主張する人を見るたびに私は荒れ野の誘惑の場面を思い出します。イエス様がそのお働きを始めようとするまさにその時に、イエス様は荒れ野に導かれ、そこで悪魔に会い、様々な誘惑を受けられました。問題はこのお話の中で悪魔が何を申し出て、イエス様が何を退けられたのかということです。悪魔がイエス様に申し出たのは石をパンに変えるということと、天使たちに命じて自分の身を守らせるということ、そして自分を拝めばこの世のすべての国々を支配させるということ、言い換えれば、経済的な力と霊的な力、そして政治的な力の３つを得て

自分に仕えよということです。イエス様は神様との関係からそれらをすべて拒否されましたが、私からすれば力により頼めば平和や繁栄を打ち建てられると主張する人々は、悪魔のこの誘惑に屈した人々のように見受けられるのです。

悪魔は巧妙です。「莫大な経済力を持ち、大きな宗教的な力さえも利用して、政治的な力、権力を握れば、行使すれば、こんなに繁栄できるぞ」と再三私たちに持ち掛けてきます。しかし、これに乗っかることは結局は悪魔に仕えることであり、私たちを神様から引き離し、滅亡へと追いやることに他なりません。

かつて軍人として名高いナポレオン・ボナパルトは、自分の往年の征服を振り返ってこう言ったと伝えられています。「アレキサンダー、シーザー、シャルマーニュ、そして予は、偉大な帝国を建設した。しかし、彼らは何に依存したのか。彼らは武力に依存したのだ。しかし、何世紀も前に、イエスは愛の上に建てられた帝国を創設し給うた。そして、今日に至ってもおびただしい数の人々が彼のために死ぬのである」と。ナポレオンのこの言葉を引用して、キング牧師はこのように語っています。「誰がこれらの言葉の真実性を疑うことができようか。過去の偉大なる軍人指導者たちは去り行き、彼らの帝国は崩壊し、灰じんに帰してしまった。しかし、愛の基の上に堅固に堂々と建設されたイエスの帝国は、なお大きくなりつつある」と。

力によって成し遂げられるものは皆一時的なものであり、それらはやがて虚しく消え去っていきます。力により頼んでも行き着くところは滅びです。しかし、愛はいつまでも残ります。そして、愛は武力や権力といった形を決して取りません。イエス様の十字架に示された無力こそ究極の愛の形です。そして、その力、「無力の力」、「愛の力」は武力や権力といったこの世の力よりもはるかに強いのです。

私はイエス様の十字架を眺めた時に与えられるこの眼鏡で、今の安全保障も考えたいと願います。安全保障に関して言えば、今は「軍拡と軍備増強によって平和を守るか」、あるいは「軍備なしで無防備に生き、他の国に支配蹂躙されるか」の二択しかな

いかのような議論になっているのではないでしょうか。しかし、進んでいく終末時計の針が私たちに予感させるように、軍拡競争は必ず全世界を死へと導いていきます。「軍拡と軍備増強による平和」、そんなものは悪魔がささやく妄想でしかありません。安全保障に関しては、私たちは本当にこの二択しかないのでしょうか。

その時に、私たちは敵をも愛し給う徹底的に武装解除したイエス様の愛、十字架の愛を思い出したいのです。そこで示された「無力の力」、「愛の力」でしか神様の平和、神様の御心は成し遂げられません。結論ははっきりしています。すべての人々が武装解除し、力により頼むことを止めない限り、また敵をも愛さない限り、この地に「神の国」は打ち建てられないのです。

であるならば、私たちがしなければならない安全保障の議論は「私たちが武器を持つかどうか」ではなく、「どのようにすれば私たちが敵とみなす、しかし同時に愛すべき隣人でもある国々、人々が武器を下ろすように援助することができるのか。武装解除へと、平和における自由へと共に歩んでいくことができるのか」といったものではないでしょうか。

くしくも先月の 2 月 11 日に教区の社会部が主催する集会があり、哲学者の高橋哲哉先生が「戦争の危機に向き合う」と題して講演をされました。その中で、中国との安全保障に関して仰っていたことが私の印象に残っています。高橋先生曰く、日本が中国と国交を正常化する際に結ばれた日中平和友好条約には次のような条文があるとのことです。

「第一条

1　両締約国（日本と中国）は、主権及び領土保全の相互尊重、相互不可侵、内政に対する相互不干渉、平等及び互恵並びに平和共存の諸原則の基礎の上に、両国間の恒久的な平和友好関係を発展させるものとする。

2　両締約国は、前記の諸原則及び国際連合憲章の原則に基づき、相互の関係におい

て、すべての紛争を平和的手段により解決し及び武力又は武力による威嚇に訴えないことを確認する。

第二条

両締約国は、そのいずれも、アジア・太平洋地域においても又は他のいずれの地域においても覇権を求めるべきではなく、また、このような覇権を確立しようとする他のいかなる国又は国の集団による試みにも反対することを表明する。」

高橋先生は「中国との安全保障に関して言えば、いくら中国に対して軍備を増強しても、中国の軍の規模や配備しているミサイルなどから対抗するのは無理である。この日中平和友好条約の条文に基づいて平和のための外交交渉を粘り強く行っていかなければならない。憲法 9 条をフルに活用し、さらにこうした粘り強い外交交渉を通してアジア地域の武装解除を成し遂げていく道こそ安全保障の道であり、平和への道である」と語っておられました。高橋先生のこの考え方は、私が先程申しあげた、「どのようにすれば私たちが敵とみなす、しかし同時に愛すべき隣人でもある国々、人々が武器を下ろすように援助することができるのか、武装解除へと、平和における自由へと共に歩んでいくことができるのか」という問いの一つの具体的な答えだと思います。

願わくは私たち、イエス様の十字架から示される「無力の力」、「愛の力」でこの世界に神様の御心を成していく使命をしっかりと自覚することができますように。このレントの期間、悔い改めの心をしっかりと宣べ伝えて、「目には目を。歯には歯を。武力には武力を」という考え方を変えていきたい、憎しみでもって敵に対抗していくことを基礎に据えた安全保障の考え方を根本から覆していきたい、そうしてこの世界を武装解除へと導いていきたいと願います。

祈りましょう。　　――以下、祈祷――